

# 女子青年の化粧行動と対人恐怖心性の関連

米倉 志穂・吉岡 和子

**要旨** 本研究では、社会的ひきこもりの背景の1つである対人恐怖心性を理解するため、人がどのように自分を見せようとし、また、自分の見せたい自分になっているのかについて、自己呈示との関連を検討することを目的とした。自己呈示においては、女性が自分を見せる手段として用いる「化粧」に注目した。

調査の対象は、従来、対人恐怖心性が高まるとされる青年期にあたる20代の女性で、質問紙調査と実験を行った。

その結果、化粧について、対人恐怖心性尺度の得点の高い者ほど、自分の化粧をした顔について「暖かい」と評価する傾向がみられた。化粧によって単に自分を隠そうとするだけでなく、他人に「冷たい」という印象を与えないための工夫であると考えられた。

**キーワード**：対人恐怖心性 自己呈示 化粧行動 女子青年

## 問題と目的

### 1. 社会的ひきこもりと対人恐怖心性

近年、テレビや新聞等で「ひきこもり」という言葉をよく目にする。これは、アメリカ精神医学会の編纂した診断と統計のためのマニュアルDSM-IVの中で、“social withdrawal”と呼ばれる症状名のことを意味しており、直訳すると「社会的ひきこもり」である。

ひきこもりと関連の深い精神障害の主なものとしては、広汎性発達障害、強迫性障害を含む不安障害、身体表現性障害、適応障害、パーソナリティ障害、統合失調症などをあげることができる。そして、日本においてひきこもっている人の多くが有する症状であり、日本特有の症状として注目されているのが、対人恐怖症であ

る。これは社会不安障害とも言われ、対人場面において耐え難い不安・緊張を抱くために、人と関わることを恐れ、人の視線を気にする、人前でひどく緊張する、赤面、震え、腹痛や下痢、どもる、動悸、息切れといった症状が見られる。対人恐怖症は、DSM-IVでははっきりとした分類はなされていないが、不安障害に含まれるものとして考えられている。

### 2. 自己呈示と化粧

人は、人に「見られる」ということを避けては生きられない。私たちは日々、他人と接し、自分が「見られる」という社会の中で生きている。その中で、私たちは意識的・無意識的にさまざまな自己の側面の中から、特定の側面を選んで「見せ」、他の部分を「見せない」という

ことを行うがこれを「自己呈示」という(安藤、1994)。

人は他人と接する中で自分の「見せ方」をどのように工夫し、自己呈示を行っているのだろうか。

多くの女性は、思春期を境に自分自身の外見を「化粧」を通していわば「演出」していくという経験を積み重ねる。「化粧をする」ということは、すなわち、他者から見られることを前提に、自分自身のあり方を見つめ直すということである。肌の上に色をのせることは、自分自身のあり方を変容せざるを得ない。そのことを知っている女性たちは、「自我は社会的に構築される」という脳科学の近年の命題をいわば「日常」として生きてきた。女性の化粧でも、とりわけ眉や目、口元といったパーツを意図的にメイクする。これは、人とのコミュニケーションにおいて重要な顔の表情に関わるパーツであるためである。人は無意識にこれらのパーツを見て相手の心情を感じ取る。

以上を踏まえて、本研究では女性に着目し、女性の身だしなみとも言われる化粧に焦点を当てる。先行研究では、対他者的効用として、「化粧による積極的自己呈示」と「化粧による消極的自己呈示」に大別されている(野澤・沢崎、2007)。そして、対人恐怖傾向が低く、青年期相応の自己愛を有する者は、化粧の効用を、自己をより魅力的に見せるものと積極的に捉え、化粧することによって肯定的な気分が上昇すると感じていた。それに対し、対人恐怖傾向の強い者は、化粧の効用を、負の状態の自分を隠したり、目立たなくしたりするためのものと捉え、不安やイライラなどの否定的気分が低下すると感じていることが示されている。

### 3. 目的と仮説

社会的ひきこもりの背景の1つである対人恐怖心性を理解するため、人がどのように自分を見せようとし、また、自分の見せたい自分になっているのかについて、化粧行動との関連を検討することを目的とする。仮説は以下の通りである。

対人恐怖心性が高い者は低い者より、1. 化粧による消極的な自己呈示をする傾向がある  
2. 自分の化粧をした顔に対する満足度、自分の素顔に対する満足度が低い  
3. 中間の化粧(茶色のアイシャドウ、ベージュ色の口紅)を好む  
4. 化粧にかかる時間は少ない。

### 方法

#### 1. 調査時期と調査対象

福岡県立大学女子学生10名、他大学女子学生6名、社会人女性4名の計20名に対し、2010年12月に調査を行った。対象者の平均年齢は21.6歳(SD=0.86)であった。

#### 2. 調査内容

##### 1) 対人恐怖心性について

対人恐怖心性尺度(堀井・小川、2001)より、尺度I：自分や他人が気になる悩みの5項目、尺度IV：目が気になる悩みの5項目を抜粋して用いた。

尺度I：自分や他人が気になる悩み

- ・他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる
- ・自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう
- ・自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう

- ・自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする
- ・人と会うとき、自分の顔つきが気になる

#### 尺度Ⅳ：目が気になる悩み

- ・人と目を合わせていられない
- ・人の目を見るのがとてもつらい
- ・人と話をするとき、目をどこにもっていかわらない
- ・顔をジーンと見られるのがつらい
- ・向かい合って仕事をしているときに、相手に顔を見られるのがつらい

## 2) 化粧について

### (1) 現在の化粧への評価

対称的な形容詞対 8 項目（暖かい—冷たい、積極的な—消極的な、親しみ易い—近寄り難い、子どもっぽい—大人っぽい、落ち着いた—躍動的な、柔らかい—硬い、かわいい—きれい、地味な—派手な）について 7 段階評定で印象評定を求めた。教示：「現在のあなた自身の化粧を思い浮かべて、その印象に最も当てはまる番号を、○で囲んでください。」

### (2) 自分の化粧をした顔に対する満足度

自分自身の普通の化粧している顔を思い浮かべてもらい、「現在のあなた自身の化粧した顔について、満足していますか？」という問いに対して、その満足度を 0・10・20・30・40・50・60・70・80・90・100%の10段階評定で当てはまる場所に○をつけてもらった。

### (3) 自分の素顔についての満足度

「あなたは自分の素顔に満足していますか？」と尋ね、0・10・20・30・40・50・60・70・80・90・100%の10段階評定で当てはまる場所に○をつけてもらった。

### (4) 化粧に対する意識

化粧に対する意識を調べるため、「あなたは化粧をすることが好きですか」という問いに「はい・いいえ」で回答を求めた。

### (5) 化粧をする理由

化粧をする理由を以下の 8 項目から 1～3 位までの 3 つを選んでもらった。教示：「あなたが化粧する理由は何ですか？当てはまるものの上位 3 つの番号をお答えください」

【理由】①社会の常識（女性の身だしなみ）だから②肌の悩み（ニキビ・毛穴など）を隠すため③他人にほめてもらいたいから④自分の顔の造りに対するコンプレックスを軽減させるため⑤美しくなることが楽しいから⑥友人がしているから何となく⑦他人に素顔の自分を見られるのが怖いから⑧より魅力的になれるから

### (6) 化粧にかかる時間

「普段、化粧にどれくらい時間をかけますか」という問いに、約何分かかるといって回答を求めた。

### (7) 化粧をするときに重視する点

化粧をするときに、どの部分に力を入れるのかということ調査するために、「ベースメイク（肌作り）とポイントメイク（アイメイク等）のどちらを重視していますか？」と尋ねた。

### (8) 場面による化粧の違い

場面によってどのように化粧を変えるのかを調査するために、「場面によって、メイクを変えますか？」という問いに「はい・いいえ」で回答を求めた。さらに、「はい」と答えた者には、「①アイシャドウの色②口紅の色③チークの色④眉の形⑤その他の 5 項目から、場面によって変えるものの番号を、すべて○で囲んでください。」と尋ねた。「⑤その他」については自由に回答を記入してもらった。

(9) ノーマイクで外出できるかどうか

化粧にどれくらい依存しているのかということ进行调查するために、「ノーマイクで外出できますか?」という問いに「はい・いいえ」で回答を求めた。さらに、「はい」と答えた者については、「一緒にいる人について:①家族②友人③先輩④恋人⑤片想いの男性」、「外出場所について:①コンビニ②レストラン③デパート④アルバイト」の項目で当てはまるものすべてに番号に○をつけてもらった。

3. 実験内容

1) 実験手続き

Figure 1のように、被験者にはモニターと50cm距離をとり着席してもらった。

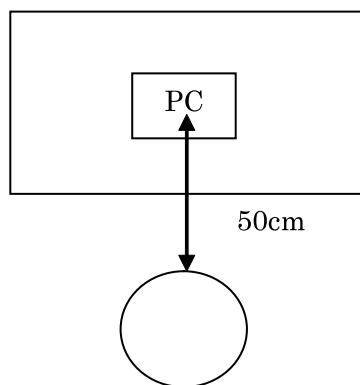


Figure 1

2) 化粧タイプへの評価

KOSEエスプリークプレシャスのビューティーシミュレーターにて、アイシャドウ(青・茶・ピンク)、口紅の色(赤・ピンク・ベージュ)の組み合わせを変えて作成した9種類の化粧タイプの画像を、モニターにランダムに表示し、その印象について8つの形容詞対(暖かい—冷たい、積極的な—消極的な、親しみ易い—近寄り難い、子どもっぽい—大人っぽい、落ち着いた

た—躍動的な、柔らかい—硬い、かわいい—きれい、地味な—派手な)にそれぞれ7段階で評価してもらった。

以下に9種類の化粧タイプ(アイシャドウの色—口紅の色)を示す。アイシャドウの色により、(1)クール(青)、(2)中間(茶)、(3)かわいい(ピンク)の3つのタイプに分けた。(1-1)青—赤(1-2)青—ピンク(1-3)青—ベージュ(2-1)茶—赤(2-2)茶—ピンク(2-3)茶—ベージュ(3-1)ピンク—赤(3-2)ピンク—ピンク(3-3)ピンク—ベージュ

3) 好みの化粧

「以上の9タイプの中で、あなたが客観的に見て好む化粧のタイプはどれですか?また、その理由をお答えください。(客観的評価)」と「あなたが自分もそうなりたいと思う化粧のタイプはどれですか?また、その理由をお答えください。(主観的評価)」について回答を求めた。

結果

1. 化粧に関する基礎集計

1) 自分の化粧をした顔に対する満足度

結果をFigure 2に示す。平均は58.0%(SD=14.36)で、40%~80%で回答があった。

平均値は50%を超えており、60%以上と回答した者が12名いることから、おおむね現在の自分の化粧をした顔について満足している結果となった。

2) 自分の素顔に対する満足度

結果をFigure 3に示す。平均は35.5%(SD=11.46)で、20%~50%で回答があった。

60%以上と回答した者がおらず、平均値も低いことから、現在の自分の素顔についてあまり満足していないという結果となった。

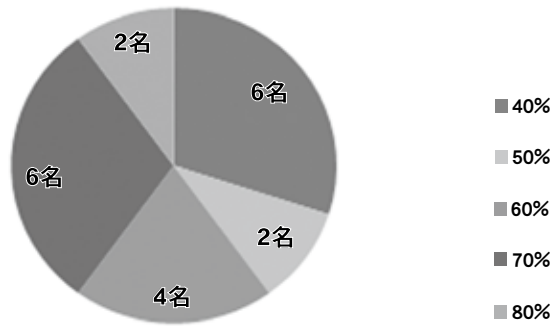


Figure 2 現在の自分の化粧の満足度

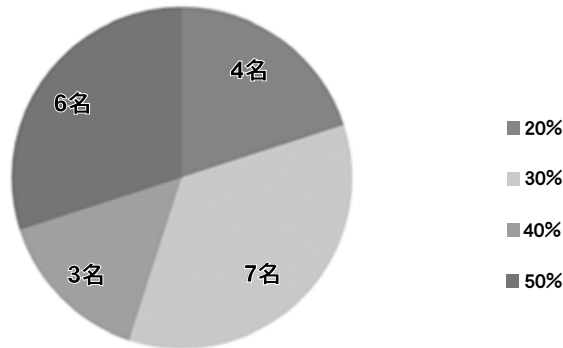


Figure 3 素顔の満足度

### 3) 化粧に対する意識

「あなたは化粧をすることが好きですか」という問いに対して、「はい」と答えた者は18名、「いいえ」と答えた者は2名であった。ほとんどの被験者が「はい」と回答していることから、化粧に対する意識が強いことが窺われた。

### 4) 化粧をする理由

結果をTable 1に示す。

化粧をする一番の理由として「④自分の顔の造りに対するコンプレックスを軽減させるため」と回答している者が8名と多いことから、消極的自己呈示を示す傾向が見られた。しかしその一方で、「⑧より魅力的になれるから」と

いう積極的自己呈示を示す項目を選択している者も多かった。

### 5) 化粧にかかる時間

被験者の平均所要時間は17.75分 (SD = 7.34) で、人数の多い方から、「15分」と答えた者が8名、「30分」と答えた者が4名、「20分」と答えた者が4名、「10分」と答えた者が3名、「5分」と答えた者が1名であった。ポーラ文化研究所 (2008) が行った調査では、20～24歳の女性の平均所要時間が27.5分であり、本研究の被験者はやや短めであった。

Table 1 化粧をする理由

	1位	2位	3位
①社会の常識（女性の身だしなみ）だから	3	1	3
②肌の悩み（ニキビ・毛穴など）を隠すため	2	4	6
③他人にほめてもらいたいから	0	1	3
④自分の顔の造りに対するコンプレックスを軽減させるため	8	1	3
⑤美しくなることが楽しいから	1	3	2
⑥友人がしているから何となく	0	1	1
⑦他人に素顔の自分を見られるのが怖いから	0	0	0
⑧より魅力的になれるから	6	9	2

数値は人数を示す

#### 6) 化粧をするときに重視する点

「ベースメイク」と答えた者は4名、「ポイントメイク」と答えた者は16名であった。ポイントメイクと答えた者が多いことから、自分の見せ方を工夫する意識が高いことが窺われた。

#### 7) 場面による化粧の違い

「場面によって、メイクを変えますか?」という問いに「はい」と答えた者は16名、「いいえ」と答えた者は4名であった。「はい」と答えた16名すべてが「④アイシャドウの色」を選択し、16名中6名が「②口紅の色」「⑤その他」、16名中3名が「③チークの色」を選択した。「⑤その他」の内訳は、「つけまつげの有無」4名、「アイラインの有無」4名、「アイラインの引き方」2名であった。

ほとんどの被験者が場面によって化粧を変化させるということから、6)の結果と同様で、

自分の見せ方を工夫していることが窺われる結果となった。

## 2. 対人恐怖心性との関連

堀井・小川(2001)で示されている先行研究の結果に基づき、大学生の下位尺度の得点の平均点(Table 2)を基準に、被験者を高得点群(H群)と低得点群(L群)の2つの群に分けてt検定を行った。

### 1) 現在の化粧への評価

まず、「自分や他人が気になる悩み」得点に基づきt検定を行ったところ、Table 3に示すように、「子どもっぽい—大人っぽい」「柔らかい—硬い」において有意な差が、「暖かい—冷たい」、「かわいい—きれい」において有意傾向で差がみられた。

次に、「目が気になる悩み」得点に基づきt

Table 2 対人恐怖心性の得点

	堀井・小川(2001)	本研究
自分や他人が気になる悩み	13.88 (6.10)	12.50 (5.39)
目が気になる悩み	8.99 (5.93)	12.80 (4.91)

Table 3 「自分や他人が気になる悩み」と現在の化粧の印象評定

	H群 (n=10)	L群 (n=10)	t値
暖かい—冷たい	3.10 (0.83)	4.10 (1.37)	-1.48+
積極的な—消極的な	4.00 (1.00)	3.50 (1.36)	-0.29
親しみ易い—近寄りがたい	3.00 (0.63)	3.60 (1.28)	-0.78
子どもっぽい—大人っぽい	3.30 (1.10)	4.70 (1.27)	-2.16*
落ち着いた—躍動的な	3.70 (1.10)	3.20 (1.33)	-0.27
柔らかい—硬い	3.10 (0.70)	4.40 (1.69)	-1.77*
かわいい—きれい	3.60 (0.92)	4.40 (0.92)	-1.46+
地味な—派手な	3.00 (1.34)	3.60 (1.28)	-0.41

数値は平均値 (SD)を示す +p<.10 \*p<.05

Table 4 「目が気になる悩み」と現在の化粧の印象評定

	H群 (n=10)	L群 (n=10)	t値
暖かい—冷たい	3.10 (0.83)	4.10 (1.37)	-1.48+
積極的な—消極的な	4.00 (1.18)	3.50 (1.20)	-0.29
親しみ易い—近寄りがたい	3.00 (0.63)	3.60 (1.28)	-0.78
子どもっぽい—大人っぽい	3.70 (1.10)	4.30 (1.55)	-0.37
落ち着いた—躍動的な	3.60 (0.92)	3.30 (1.49)	0.29
柔らかい—硬い	3.30 (0.64)	4.20 (1.83)	-0.93
かわいい—きれい	3.80 (0.87)	4.20 (1.08)	-0.26
地味な—派手な	3.10 (1.30)	3.50 (1.36)	0.08

数値は平均値 (SD)を示す +p<.10

検定を行ったところ、「暖かい—冷たい」のみ有意傾向で差がみられた (Table 4)。

## 2) 各化粧タイプの評価

各化粧タイプの印象評定の得点について、まず、「自分や他人が気になる悩み」得点に基づきt検定を行ったところ、Table 5に示すように、クール (ベージュ) の「柔らかい—硬い」「かわいい—きれい」で有意な差が、クール (赤) の「地味な—派手な」クール (ピンク) の「柔らかい—硬い」クール (ベージュ) の「子どもっぽい—大人っぽい」において有意傾向で差がみられた。

次に、「目が気になる悩み」得点に基づきt

検定を行ったところ、Table6に示すように、かわいい (ピンク) の「積極的な—消極的な」、中間 (赤) の「積極的な—消極的な」「落ち着いた—躍動的な」「柔らかい—硬い」「地味な—派手な」において有意な差が、中間 (ピンク) の「積極的な—消極的な」において有意傾向で差がみられた。

## 3) 自分の化粧をした顔に対する満足度

「自分や他人が気になる悩み」、「目が気になる悩み」得点に基づきそれぞれt検定を行ったところ、有意な差はみられなかった。

Table 5 「自分や他人が気になる悩み」と化粧タイプの印象評定

化粧タイプ (口紅)		H群 (n=10)	L群 (n=10)	t値
クール (赤)	地味な—派手な	5.80 (0.60)	6.40 (0.66)	-1.64+
クール (ピンク)	柔らかい—硬い	4.70 (1.00)	5.40 (0.66)	-1.34+
クール (ベージュ)	子どもっぽい—大人っぽい	5.10 (1.14)	5.90 (0.30)	-1.67+
	柔らかい—硬い	4.60 (1.20)	5.70 (1.00)	-1.74*
	かわいい—きれい	4.90 (1.04)	5.80 (0.60)	-1.89*

有意差がみられたもののみ抜粋

数値は平均値 (SD)を示す +p&lt;.10 \*p&lt;.05

Table 6 「目が気になる悩み」と化粧タイプの印象評定

化粧タイプ (口紅)		H群 (n=10)	L群 (n=10)	t値
かわいい (ピンク)	積極的な—消極的な	2.50 (0.50)	3.10 (0.54)	-2.11*
中間 (赤)	積極的な—消極的な	3.30 (1.10)	4.40 (0.80)	-2.08*
	落ち着いた—躍動的な	3.90 (1.70)	2.50 (0.50)	-2.02*
	柔らかい—硬い	4.20 (1.33)	2.70 (0.46)	-2.89*
	地味な—派手な	5.10 (1.14)	3.40 (0.92)	-3.18*
中間 (ピンク)	積極的な—消極的な	3.60 (0.80)	4.30 (0.90)	-1.34+

有意差がみられたもののみ抜粋

数値は平均値 (SD)を示す +p&lt;.10 \*p&lt;.05

## 4) 自分の素顔に対する満足度

「自分や他人が気になる悩み」得点に基づきt検定を行ったところ、有意傾向で差が見られ、H群は31.00% (SD=11.97)、L群は40.00% (SD=9.43)であった。

「目が気になる悩み」得点に基づきt検定を行ったところ、有意な差はみられなかった。

## 5) 好みの化粧

## (1) 客観的評価

「自分や他人が気になる悩み」得点に基づいて、好みの化粧の客観的評価を検討するために、 $\chi^2$ 乗検定を行ったところ、有意な人数の差はみられなかった (Table 7)。「目が気になる悩み」得点に基づいて、同様に検討したところ、有意な人数の差はみられなかった (Table 8)。

Table 7 「自分や他人が気になる悩み」と好みの化粧 (客観的評価)

	かわいい	クール	中間
H群	4	2	4
L群	1	4	5

 $\chi^2(2)=2.58$  数値は人数を示す。

Table 8 「目が気になる悩み」と好みの化粧 (客観的評価)

	かわいい	クール	中間
H群	3	2	5
L群	2	4	4

 $\chi^2(2)=0.98$  数値は人数を示す。

## (2) 主観的評価

「自分や他人が気になる悩み」得点に基づいて、好みの化粧の主観的評価を検討するため



に、 $\chi^2$ 乗検定を行ったところ、有意な人数の差はみられなかった (Table 9)。「目が気になる悩み」得点に基づいて、同様に検討したところ、有意な人数の差はみられなかった (Table 10)。

Table 9 「自分や他人が気になる悩み」と好みの化粧 (主観的評価)

	かわいい	クール	中間
H群	3	1	6
L群	1	4	5

$\chi^2(2)=2.89$  数値は人数を示す。

Table 10 「目が気になる悩み」と好みの化粧 (主観的評価)

	かわいい	クール	中間
H群	2	1	7
L群	2	4	4

$\chi^2(2)=2.62$  数値は人数を示す。

#### 6) 化粧にかける時間

「自分や他人が気になる悩み」、「目が気になる悩み」得点に基づきそれぞれt検定を行ったところ、有意な差はみられなかった。

#### 考察

仮説「対人恐怖心性が高い者は低い者より、  
1. 化粧による消極的な自己呈示をする傾向がある  
2. 自分の化粧をした顔に対する満足度、自分の素顔に対する満足度が低い  
3. 中間の化粧 (茶色のアイシャドウ、ベージュ色の口紅) を好む  
4. 化粧にかける時間は少ない。」について、検討を行った結果、以下のことが示唆された。

仮説1については、現在の自分の化粧をした顔について「自分や他人が気になる悩み」得点の高い者は、低い者よりも「暖かい」「子どもっぽい」「柔らかい」「かわいい」と評価する傾向が、「目が気になる悩み」得点の高い者は、低い者よりも「暖かい」と評価する傾向がみられた。他人の目を気にして「冷たい」「大人っぽい」「硬い」「きれい」というやや近寄りがたい印象を相手に与えないように化粧を工夫している消極的な自己呈示をする傾向が伺える。対人恐怖心性の得点が高い者の現在の化粧の評価で共通して「暖かい」という結果が得られたことから、化粧を使うことで、他人になじみやすい印象をもってほしい願望があることが推察された。岩男・松井 (1984) において、「内向的な人は、化粧によって対人的積極性が強くなった」という結果とも関連していると思われる。単に自分を隠そうとするものではなく、自分の見せ方を工夫している点から、これは積極的自己呈示につながる良い傾向だと考える。以上により、仮説1は一部支持された。

仮説2は、自分の素顔に対する満足度について、「自分や他人が気になる悩み」得点が高い者が低い者に比べて、満足度が低くなっており、仮説は一部支持された。「目が気になる悩み」については有意な差がみられず、同じ対人恐怖心性でも、気になる悩みの内容によって、自分の素顔に対する満足度が異なることが示唆された。また、自分の化粧をした顔に対する満足度については有意差がみられず、対人恐怖心性の高低とは違う要因が関連している可能性がある。

仮説3については、好みの化粧タイプについて人数の差が見られず支持されなかった。一方、化粧タイプの印象評定ではいくつか有意な

差がみられた。「自分や他人が気になる悩み」の得点が高い者は低い者に比べて、化粧タイプがクールである場合にのみ有意な差がみられ、口紅の色が赤のとき「地味な」と評価し、ネガティブな印象評定をしていた。ピンクでは、「柔らかい」、ベージュでは「子どもっぽい」「柔らかい」「かわいい」と評価しており、同じクールな化粧タイプでは、口紅の色が中間色に近づくにつれて評価がポジティブになることが推察された。

「目が気になる悩み」の場合は、化粧タイプがかわいいと中間の時に有意な差が見られ、いずれも口紅の色がピンクの時は、得点が高い者は低い者に比べて「積極的な」と評価していた。しかし、化粧タイプが中間で口紅が赤の時には「積極的な」「躍動的な」「派手な」と評価する一方で「硬い」と評価しており、対人恐怖心性が高い者は低い者に比べて、口紅の赤に影響を受け、他者に対して強さを感じる印象評定を行うことが推察された。

先行研究（向田・鈴木・磯野・加藤、2002）では、赤いアイシャドウとピンクの口紅の組み合わせの方が、青いアイシャドウとピンクの口紅の組み合わせよりも「派手、近づきたい」と評定されている。このように、アイシャドウだけでなく、口紅と組み合わせることで印象評価に有意な差が見られたのではないかと考える。青色のもつ色の印象としては、冷静、知性、忠実、冷たい、清潔、インテリ、涼しい、憂鬱、静寂などが挙げられ、ピンクは心理的に、興奮状態を落ち着かせ、緊張をほぐし、リラックスさせる色として知られており、暖色系の温かみと寒色系の落ち着きを併せ持つ色である。「自分や他人が気になる悩み」では、アイシャドウが青色の時にのみ、口紅の色で印象評定に差が

あり、アイシャドウの青色に影響を受けつつ最終的には口紅の色で評定を行っていることが推察される。一方、「目が気になる悩み」では、アイシャドウが青色の時には口紅の色で差はない結果となったことから、「目が気になる悩み」を持つ者は、アイシャドウの青色により強い影響を受け、口紅の色に注意を向けられなかったのではないかと推察される。

中間のメイクについて有意差が出ている項目が多く得られ、対人恐怖心性が高い者の方が低い者よりも中間メイクについて「積極的な」と評価していることから、中間メイクを使いこなしたら自分を積極的に見せられるように変われると考えている可能性がある。

仮説4は支持されなかった。これは、化粧によって自分の欠点を隠そうとして化粧に力を入れる者と、化粧をしても無駄だと思い、化粧にあまり力を入れない者との二分した結果ではないかと考えられる。先行研究においても、化粧の所要時間は様々であり、どのプロセスを入念に行うかどうかにも関わっている（野尻・小出・佐野・長澤・山崎・前田、2008）ことが指摘されている。

本研究では、女子青年は化粧に対する意識が強く、自分をよりよく見せようと工夫し、化粧をすることで自分に自信をつけようとしている傾向が見られた。被験者の人数が20名と少なかったため、当初予測していた結果は十分に得られなかった。また、被験者の所属（大学や職種）に偏りがあるため、類似した評価が見られ、比較が難しくなったと考える。今後は、被験者の人数を増やし、学科や職種に偏りのないように実験を行いたい。また、今回の調査対象者の平均年齢が21.6歳と若いことから、化粧の経験がまだ浅いため、結果に違いが見られなかった

のではないかと考える。そこで、年齢を30代に広げて実験を行えば、メイクの好みのパターンが増え、アイシャドウと口紅だけでなく、チークや眉の色・書き方など、さまざまな角度からの検討が可能になるのではないかと考える。そして、被験者の化粧の好みを具体的に聞く質問項目（好きなアイシャドウ・口紅の色などを問う項目）を用いていなかったため、「現在の自分の化粧」というものが被験者自身のイメージによるものだけになり、曖昧になったと考える。質問項目の工夫も行いたい。

化粧が「女性の身だしなみ」とも言われることから、本研究では被験者を女性に限定して実験を行ったが、今後は化粧の客観的効用に着目して、男性から見ての評価と女性から見ての評価の違いや意識の違いを検討しても興味深いと考えている。

## 文献

- 安藤清志 1994 見せる自分/見せない自分—自己呈示の社会心理学（セレクション社会心理学-1）サイエンス社 Pp6-7
- 堀井俊章・小川捷之 2001 対人恐怖心性尺度 心理測定尺度集Ⅲ 堀洋道 監修・松井豊 編 サイエンス社 Pp193-198
- 岩男寿美子・松井豊 1984 化粧の心理的効用（Ⅲ）—化粧の心理的変化 日本社会心理学会第25回大会発表論文集 Pp128-129
- 向田茂・鈴木絢香・磯野勝宣・加藤隆 2002 化粧による顔の印象の変化について—合成による刺激統制の試み— 電子情報通信学会 技術研究報告 HCS、ヒューマンコミュニケーション基礎 102(29)1-6 2002-(1)
- 野尻佳代子・小出未央・佐野江里・長澤由佳・山崎和彦・前田亜紀子 2008 日本人成人女性の化粧におけるプロセスと効果 実践女子大学 生活科学部紀要第45号, 7-11
- 野澤桂子・沢崎達夫 2007 対人恐怖傾向と化粧の効用意識との関連 目白大学心理学研究 第3号 95-99
- ポーラ文化研究所 2008 女性の化粧行動・意識に関する実態調査～メイク編2008～<http://www.poholdings.co.jp/CSY/culture/bunken/report/pdf/090213make2008.pdf>